

ドラマセラピーの実践・研究・手法

アーツ・ベイスト・リサーチ（ABR）の授業

尾上 明代

今年度、春学期に立命館大学人間科学研究科で、新しい科目を担当した。芸術活動を研究プロセスに組み込み、その芸術を通して探究する研究法である ABR＝Arts-Based Research（アーツ・ベイスト・リサーチ）を学ぶ授業である。1993 年、スタンフォード大学の Elliot W. Eisner により提唱され始めた Arts-Based Research は、クリエイティブ・アーツ・セラピー（創造的芸術療法）や質的研究法の発展等から大きな影響を受け、日本においても近年発展しつつある研究法である。この研究法を理解するには、クリエイティブ・アーツ・セラピーの「体験的」理解が欠かせない。ゆえに、この授業では研究法の一つを座学で学ぶというだけではなく、自分や他者、また興味のある対象を「アーティスティックに」探索することの意味と重要性を理解してもらうことを目指そうと考えた。

「芸術」（アート）を広い意味でとらえ、言葉だけに頼らない・身体（体感）から探索を行う・右脳の資源に働きかける等の体験をしてもらうために、多くのゲスト講師（ABR のアプローチの一つ・アートグラフィーの日本における第一人者・笠原広一さん、ミュージックセラピストの高田由利子さん、アートセラピストの倉石聡子さん、ダンスセラピストの神宮京子さん、そして、研究科の修了生・尾上都さんと張秋陽さん）を招き、多様な講義やワークショップをしていただいた。私も講義の他にドラマセラピーのワークショップを何回か実施したが、ふだんの授業ではあまりしない、ドラマ以外のモダリティを組み合わせたワークショップを体験してもらった。そしてその意義と手応えを改めて感じる事ができた。15 回の授業を終えて、院生たちの人間理解の視点が増えて、新たな世界が開けたのではないかと考えている。

そこで今号では、この授業について紹介する。しかし、一回の原稿では全部を書きれないので、研究科修了生（今回のゲストスピーカーの一人）の体験事例と、何人かの「期末レポート」を提示したいと思う。

The Story Within （仮訳：うちにひそむ物語り）

受講生たちがさまざまな芸術に触れ、そしてそれらを使った表現に慣れた最終段階で、The Story Within というワークを、この授業用にアレンジして実施した。これは、私の友人である Yehudit Silverman というカナダのドラマセラピスト/ダンスムーブメントセラピストが開発した手法で、ごく簡単に説明すると、各参加者が、今の自分を表現していると思われる、おとぎ話や昔話の登場人物を選定し、その人物のお面を制作、それを使ってドラマをするというものである。このような活動を体験したことのない方は、おとぎ話の人物になるとか、お面を作るなどと聞いただけでは、それにどれほどの意味があるのか、と思われるかもしれない。初回からの丁寧な授業プロセスを深めたのちに実施することが必須であるが、そのようなタイミングで、参加者のレディネスが熟したときに行なうと、このワークは真価を発揮し、本人が思いもよらない深い気づきや新たな変容が訪れることがよくある。The Story Within は素晴らしい「実績」をもつ手法で、世界中のドラマセラピストたちに実践されているものの一つである。

一寸法師

では、受講生の一人 A さんの体験を、彼女からいただいた自主的なレポートの内容をもとに紹介する。

A さんは「一寸法師」を選んだ。作ったお面をかぶるとなぜか彼女はドキドキした。「小さい世界」から「大きい世界」に放り出された感覚で、誰かと交流したい気持ちがしたそうだ。A さんは自分の「ドキドキ」を次のように考察した。

一寸法師というキャラクター(お面)が私の身体を借りて、初めて身体を持った存在になった瞬間だと考えられます。最初、私自身、「なぜこんなにドキドキするのか？」と違和感を持ちましたがそれは私ではなく「一寸法師」が感じている感情だと気がつきました。それは、例えるなら赤ちゃんが生まれて初めて「世界」と出会う感覚のようです。記憶にはないその感覚をお面の小さくあいた「目」からまわりを見ることで追体験したような感覚が残っています。それが好奇心と不安が入り交じったドキドキ感だったのだとあとから納得しました。

Finding the Moment

「お伽草子」に書かれた「一寸法師」は、次のようなお話である。一寸法師は、京の都へ侍の修行に出た。門をたたいたお大臣の娘であるお姫様に気に入られ、ある日、清水寺参りに行くお供を仰せつかる。その道すがら、鬼がお姫様をさらおうとするが、鬼に飲み込まれた一寸法師が針で応戦し、鬼を追い払った。あとには「打出の小槌」が残された。そして一寸法師が「打出の小槌」を振って、自分自身が大きくなり、お姫様と結ばれて末長く幸せに暮らした。

ところが授業で A さんが演じた一寸法師は自分で小槌を振らずに、それをお姫様に差し出したのだ。「これは、お姫様がお使いください」と。

The Story Within には、物語の中で自分が一番強く心が動かされた「瞬間」の場面を見つける Finding the Moment というプロセスがある。「なぜそこなのか」などと頭で分析せずに、自分の直観を信じて選び、演じてみるのが重要である。A さんにとってのその瞬間は、この小槌を差し出す場面であった。私が、必要があれば原作を変更しても良いと伝えてあったので、彼女はオリジナルな筋書きに変えたのだ。

ワークショップの次の段階では、ペアを組んだ相手にその場面を演じてもらって、今度はそれを本人が客観的に見る。A さんの相手は一寸法師になり、ひざまずいて打出の小槌を差し出すところを演じた。それを見た A さんは、一寸法師の「混じり気のない純粹さ」を感じ、お姫様がこのあと「思いがけない行動」をとることが理解できたと言う。それは、お姫様が小槌を振るという展開だった。そしてお姫様が願ったのは、自分も一寸法師のように小さくなることだった。相手（のサイズ）に合わせるという行為の視点から見ると、二人が同じ大きさであれば一緒に大きくなっても小さくなっても良いのかもしれない。だが二人が世の中の多くの人と違うサイズで生きていく選択を A さんがしたのは興味深い。

授業後、A さんはさらにその続きを創作し、私に自主的なレポートを提出した。それは以下のような物語だった。

その後、二人はお椀の船にお箸の櫂で鴨川や保津川、淀川沿いの村々を訪れ、困り事を解決していった。やがて、そのような一寸法師を慕うものたちが、次々と仲間に加わり、小さなお椀が筏のように連なった「お伽草子船団」と呼ばれるようになった。退治された鬼たちも一員になっていた。一寸法師は（内面が）成長した姿を見てもらうために、おじいさんとおばあさんが住んでいる「住吉の津」（実在した昔の港、現在の大阪にある住吉大社）に凱旋した。おじいさんとおばあ

さんは小さいながらも、たくましく成長した一寸法師の姿を見て、たいそう喜んだ。そして、無事帰還したことへの感謝を込めて、住吉大社の神様に「芝居」を奉納した。演目は「一寸法師の冒険」。経験したことを語るのではなく「劇」で披露したのである。観客は大いに喜び、それぞれがお話を持ち帰り、まわりに伝えた。伝え聞いた人々により、内容がアレンジされて、今でも日本各地に残る「一寸法師伝説」のもととなった。

私は A さんのアイディア溢れる新バージョンの一寸法師に大変興味をそそられた。何と小さな人たちは、二人だけではなかったのだ。その人たちが二人に加わり、さらには敵であった鬼たちも加わり世直しをする。そしてなぜか唐突に住吉大社が出てきてそこに凱旋するというのである。一寸法師の冒険「劇」を奉納したというのもユニークだ。経験したことを「劇」というアートにして上演することで提示したのは、まさに「ABR」であったと言える！

A さんの想像力と創造力に感心していると、さらにびっくりする報告が待っていた。彼女がこの後、何気なくネットで住吉大社の関連サイトを開いてみると、何と一寸法師のお椀と櫓が奉られている場所が住吉大社にあると書かれていたというのである！さらに詳しく調べた A さんは、一寸法師伝説が住吉大社に伝わっているとの事実（奈良女子大学教授の大谷俊太さんが、住吉大社が実施している市民向け教養講座で、2008 年 7 月に、「一寸法師と住吉」というタイトルで講演した内容）にたどり着いたようで、ご本人もその「偶然」に驚いていた。

実は、A さんは住吉大社の近くで生まれ、子どもの頃までそこに住んでいた。大社は彼女にとっての「氏神様」だという。後日、彼女が住吉大社に確認すると、「一寸法師のお椀」が住吉大社に奉納されたのは 2002 年とのこと。住吉大社が一寸法師のゆかりの地であるとの言い伝えは、地元の人にもあまり知られていないことから、大社側も説明のパネルを設置したりして周知してもらうよう努力されている。つまり、彼女が子どものころは、もちろんお椀もパネルもなかったわけで、何も知らない A さんの創作ドラマは、完全に「偶然の一致」だったことになる。

今号では、共時性を論じる予定はないので、心の深いところに触れる芸術を使った活動の結果として、このようなことが起きることもある、という記述にとどめておこう。これまで私は、ドラマセラピーの授業やセラピーセッションで、このような共時的なできごとがときたま起きるのを体験している。「偶然」と見るか、意義のあるプロセスと解釈するかがポイントである。

いずれにしても、この一連の一寸法師のワークから A さんが得たインスピレーションは「セルフ・コンパッション」と「進取の精神」だったと聞いた。スム

ーズに出来た即興オリジナルストーリーの完成後、Aさんに「なぜ、一寸法師は打ち出の小槌を自分のために使わなかったのだろう」という疑問、言い換えれば「私はなぜ一寸法師に打ち出の小槌を使わせなかったのか」という自身への問いかけが湧いた。そこで彼女が改めて感じたのは、「セルフ・コンパッション」（自分への慈しみを意味し、他者を思いやるように自分自身を大切に思うこと、ネガティブな状況でも前向きな気持ちを持ち続ける心持、心理状況）だった。

そして、ワークショップ後に「一寸法師」の話の来歴を調べる過程で初めて知った言葉が「進取の精神」（従来の習わしにとらわれることなく、積極的に新しい物事に取り組んでいこうという気質や性格を指す言い回し）だった。

一寸法師は、生まれ育った土地を後にして自ら「修行に出る」決意をして出航します。持っているのは、お椀と櫓のみ。不安もあっただろうに、一步を踏み出し、知恵と勇気でいろんな困難を乗り越えて旅を続けます。そこから「進取の精神」の強いエネルギーを受け取りました。

また、（私のストーリーの中での）彼は、自分が小さいことをネガティブにとらえることなく、かといって「立身出世してやろう」と考える野心家でもなく、自然体で、ありのままの自分を受け入れて「肯定」しています。これが「セルフ・コンパッション」です。ですので鬼退治をした後、鬼が忘れていった打ち出の小槌を使って自分が大きくなるという展開は「ありえない」と思いました。そんなことをすると「一寸法師」という存在自体を否定してしまうと考えたからです。

「彼」は今ままでよいと考えていたと思います。そして小槌を差し出されたお姫様の気持ちになると、お姫様もきっと「勇気をもって」（進取の精神で）自分を小さく変身させて、今までの世界から新しい世界へ踏み出したのかな、何を願ってもよかったのにこの選択をしたのだなと推測しました。

一寸法師のそのような振る舞いが、かえって他のもの達の関心を引き、「一寸法師」の秘密を知りたくて、自らも小さいサイズに変身するという展開が成り立ちます。小さいお椀が集まって「軍団」になって凱旋する場面が気に入っています。

この二つのインスピレーションはAさんの実人生にも影響を与えた。ちょうどAさんにとって、とてもハードルが高いことにチャレンジするかどうか、べ切間際で迷っていた時期だったそう。一寸法師」のワークに背中を押され、進取の精神とセルフ・コンパッションのおかげで、最初の一步を踏み出したという報告を受けた。

その翌日、Aさんは、さっそく授業で制作したお面をもち、数年ぶりに住吉大社にお参りに行って「一寸法師」に対面して来た。

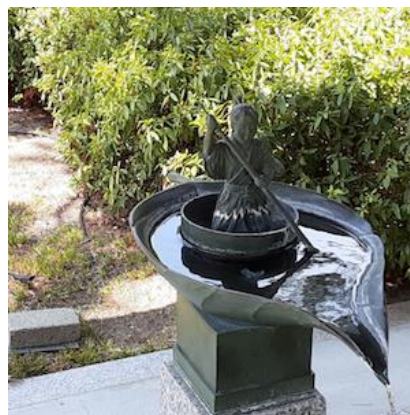
「一寸法師」は、私の「土台」にアプローチしたと言えます。言い換えると「スピリチュアルな部分」にアクセスしました。今回、私が住吉大社を訪れたのは、表面上は一寸法師のお椀がきっかけでしたが、私にとっての「土台」を再確認するためだったのかなと思いました。久しぶりに訪れた境内では、樹齢八百年～千年という大きな楠木が鬱蒼と茂り、暑い夏の日差しを遮り、影を作ってくれていました。何かほっとした、深呼吸したくなる時間でした。

物語の登場人物を演じると自分の人生とは違う体験ができる。しかし、このワークを開発した Silverman は、その一方で、「物語はふだんアクセスできない自分の中の隠された自分と繋がることができる。それは、私たちが行く必要のあるところへ連れて行ってくれる。」と述べている。そして、必要に応じてオルタナティブな物語を創り、新しく演じ、または生き直すこともできるのだ。

Aさんは、神社のお椀と櫛の前に自身のお面を置いて記念写真を撮影し、私に送って下さった。これで、一連のワークが自分の中で完結したと述べている。



ABR の授業では、多くのワークショップと講義を組み合わせることにより、受講生にさまざまな体験をもたらした。A さんの体験事例は、そのほんの一つである。他にも自分自身の新たな発見や、積年の課題の解決に繋がった人など、さまざまなことが引き起こされた報告を受けた。そのようなことが起きた理由として考えられるのは、授業内で実施したワークショップのセラピーティックな効果、そして各院生が取り組んだアートによって心身の動きを伴うプロセスが、自らを変身・転身させるダイナミズムを生み出したからだと思われる。アートを使った探究が、いかに人の心の深いところに働きかけるかを表していると言える。



受講生の最終レポートから

アートによる考察を、探索、研究と表現に使うことが ABR の主眼点である。授業では、考えたり感じたことを、芸術的な表現で発表するということを何度も実施した。その授業の期末課題を考えたとき、普通に「記述」してもらうレポートにするなら、この授業の主旨に合っていないと考えた。そこで、学んだこと、発見したこと、感じたことを表現する手段として写真を撮り、それにタイトルやキャプション、さらに短い解説を書くという形にすることで少しでもアーティスティックなレポートにしてもらうことにした。そして、受講生たちの了承を得て、その写真作品をオンラインで全員が鑑賞できるように設定した。

予想通り、各自が違った視点と感性による写真表現の数々を提出してくれて圧巻であった。教員としては、「普通の」レポート課題にしないで本当に良かったと実感している。学んだことや探索したことを芸術にしてアウトプットすることは、まさに ABR の実践そのものである。表現形態を写真にしなければならぬため、受講生たちは自分が提出したいイメージを選ぼうとするプロセスを経る。そしてその事自体がさらなる考察をもたらしている。アートとしてのイメージ、その表題と解説の提示によって、一つの学びの体験が重なりつつも広がり、異なった representation として現われてきている。

この原稿に、了承の得られた院生の写真作品と、その解説を短く編集したものを提示させていただく。(順不同)

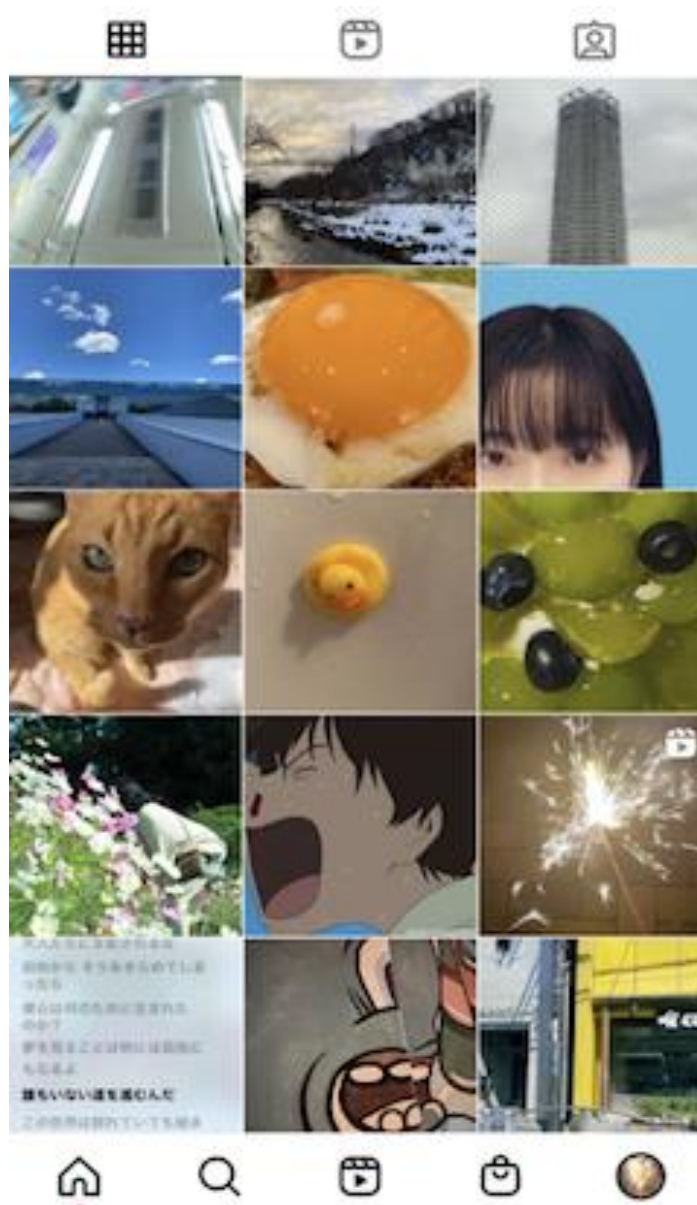
1. 「私的歩行記2021」

「本文を書くことがメインで、写真はインスタグラムのシステム上必要なので写真フォルダーから目についたものを適当に使用する。しかし、おまけの写真こそが2022の私に訴えかけてくることに気づく。

笠原広一先生の東京ウォーキング。

自分が感じてはいても言葉ではうまく捉えられない感覚や違和感を取りあえず形にしてみることで、それを試してみることで見えてくる私がいる。

私の備忘録は東京ウォーキングなのかもしれない。」



2. 「空を泳ぐ魚」



「この写真を選んだ理由について、まず、私はこの授業を通して、様々な芸術表現方法を体験しました。これにより、私は言語以外の多様な表現方法があることを改めて認識しました。この写真では普段と違う方法で魚を見ることで、『多様性』を表していると思います。人との交流は言葉だけではなく、情報が様々な形式で存在しているので、様々な視点を持つことが理解を深めることに役立つと考えられます。

この水族館での写真は、普通的水族館のように明るい照明とわかりやすい説明がないですが、天井の影から魚の存在を感じられて、それに、魚と水、自然と人間の関係もこれを通して思考できると思います。これがこの写真を選んだもう一つの理由です。

この授業を通して、私は芸術表現の力を意識しました。」

3. 「ペルソナ — 新たな自分の発見と創造 —」



「現代社会の中で生活すると、様々な情報があふれ、私たちは昔の人より多くの知識を得て、それを活用し、よりよく生活をしていると思っている。しかし、本来の自分を封じ込めて生きていたり、つかんでいるはずの自分自身の正体も実は分からず、他者の真意がどこにあるのかつかめずに、もどかしさを抱えながら生きている人々がいる。本当に私たちは自分らしくのびのびと生を謳歌しているだろうか。今を精一杯生きているだろうか。そのような事を ABR は私に問うてきた。

今回作成した「桃太郎」のお面は、私を元気づけた。何でも前向きにぐいぐい進む力を与えるような気分だった。まるで、きびだんごを分けてもらって力を得たような感じだ。仲間を得る喜び、一人ではなくみんなで1つの目標を目指すことの心強さ。迎え撃つ強敵や難題もやっつけてしまえそうな気になるのが不思議だ。そんな体験を、あんな短時間でこんなに簡単に「お面」-メタファーと言い換えても良いのかもしれないが-を使ってできてしまう ABR の力は『本当にすごい！』と感じた。」

4.「偶然の産物」

「私がなぜこの写真を選んだのかというと、『偶然の産物』の大きさに感銘を受けているからです。

私はこの授業を受講したことをラッキーだと思っています。なぜなら今までに経験したことのないこと体験させていただいたからです。この授業は第1回目からインパクト絶大でした。偶然先輩に尾上先生の授業をおすすめしてもらい、偶然この授業と他の授業が被っておらず受講登録することができ、偶然集まったこのメンバーで15回の授業を終えました。

この写真は偶然雨が降り、偶然虹が出たという、偶然の産物です。そもそもレポートが無ければ大学に来ていませんし、この部屋でなければ窓が無く見れなかったかもしれません。

偶然の産物はとても大きくて、とても貴重で、世界を変えてくれます。

この授業も私を変えてくれました。

偶然の出会いに感謝しています。」



5. 「寄せ植え -様々な草花が大きく育つことを楽しみにしています-」



「自宅の玄関先に夏の草花を寄せ植えてみました。

この授業を受け、様々な芸術を通して自分や他者、また興味のある対象を『アーティスティックに』探索することの意味と重要性を理解することができたと思います。

表現には非言語としてのコミュニケーションがあることは認識していたものの、この授業を通して感じたことは体感で感じることに、そして右脳に働きかけることで言葉では伝えきれない内面を伝えることができたり、感じたりできたりすることを実感として体験させていただくことができました。」

6.「まど」



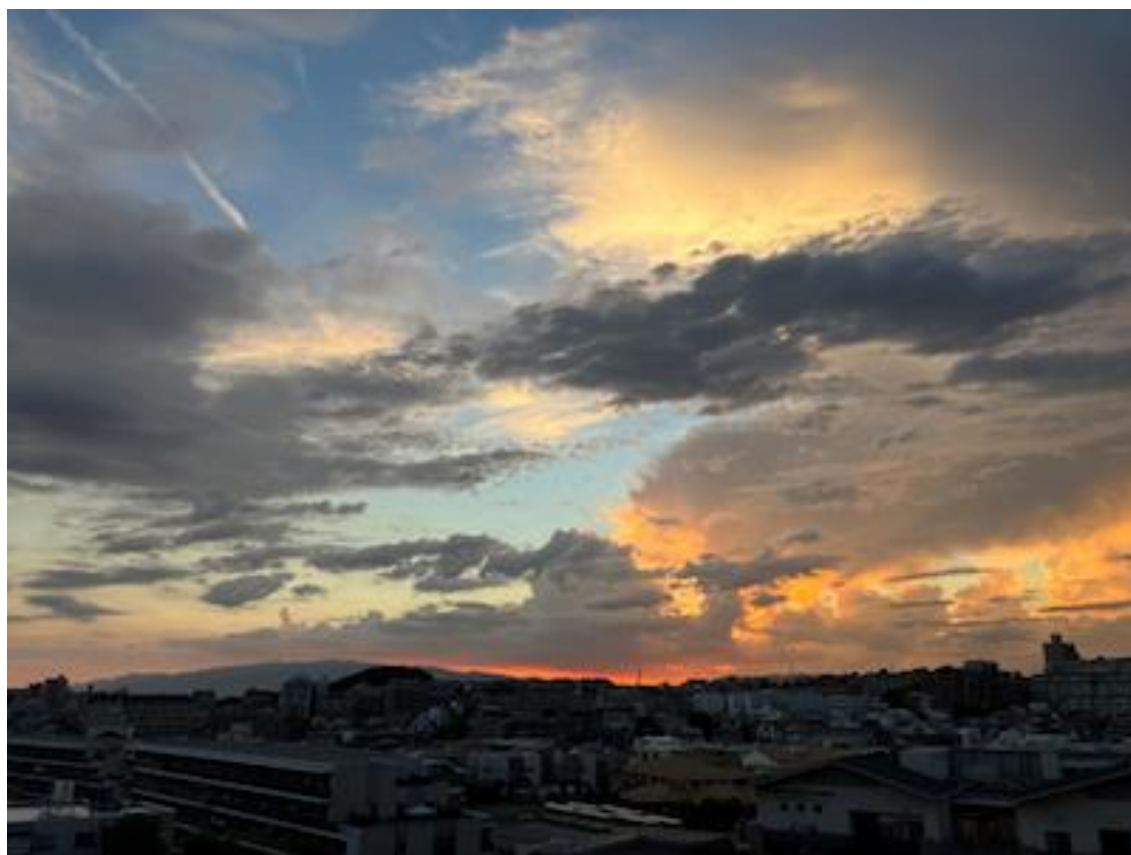
「窓の外に立っている木が授業を受けていたときの私自身。照らしてくれている陽光が ABR の授業。スクリーンカーテンに写っている影が授業により浮かび上がらせていただけた私の中の多様な側面、室内から見て窓の内側の下に映っている木の影が、この授業で他の学生さんたちの多様な表現などからも学び得た気づきや自己探求により得られたもの。部屋の中からそれらを見ているのが現在の私自身。木の陰たちは多様な形で私に取り込まれ私の一部となる。今後はその時々によって様々な様相に変化するこの映し出された影を、吸収して生かしながら自己探求や学びを続けていきたい。」

7. 「融合」

「この写真1枚に、青空、飛行機雲、夕焼け、担当の光が反射した雲、夕焼けの上の入道雲、左奥の山には雨が降っている、何層にも重なる雲、薄い雲や大きな塊になっている雲、上空へと伸びあがるような雲…様々な空の状況があります。

今回授業で学んだ ABR の芸術形態は多種多様でした。この写真と同じように、青空の上にいろんな雲の要素があり、形も色も様々に表現されていて、自己主張するわけではなく、それぞれがお互いの存在を認めあい、お互いを尊重しているところが芸術の多様性と同じように感じました。

また、今回一緒にこの授業を受講した院生たちも同じように、個性豊かで、国籍も性別も年齢も学年も背景も受講した目的も様々で、自己主張するわけではなくお互いを尊重しながら、尾上先生という空の中で、授業を受けることができたことも、この写真と同じように感じました。」



8. 「ENCOUNTER 出会い」 --アーティスティック&ドラマティック--



身を乗り出す「太陽の塔」(大阪市中之島美術館)

「Encounter、artistic、dramatic は、人とアートが出会う場である美術館が持つエッセンスであり、また今回の講義の中で発せられた言葉でもある。今回の講義全体を貫くイメージは、『出会い ENCOUNTER』である。人と人、人とアート、アートとアート、現在と過去、個人的経験と社会的経験、もう一人の自分との出会いなど、さまざまなものがアーティスティックに遭遇し、交差し共有された時間と空間であった。ABR の概念をまさに ABR 的アプローチを用いて探索した時間でもある。」

9. 「Try～新たな一歩 想像と創造～」

「バジルの変身」

いくつかの事実とイメージが私の中でつながっていき「バジルソース」へのトライとなりました。

今回の授業で、私が感じたことは「Try」でした。ABRに関する様々なことをあの授業に盛り込み、どんなふうに、受講者が感じたり新しい気付きを得たりするのか、尾上先生のTryを感じてきました。そして自分自身にとっても、ABRをどう捉えるのか、今まで触れてきたことでも新しい視点から見たり感じたりすることでどう変わる可能性があるのか、やはりこれもTryでした。今まで、目の前にあったけれども全く活用できていなかったバジルを、思い立ってソースにしようとした時、これも想像からの創造であり、私にとっては一つのTryだと感じました



10. 「過去への影響」



「自分は人前で発表するということがとても苦手である。このことはどれだけ発表のために準備してもあまり変わることがなかった。

しかし現在は少し異なっている。発表に向かう意識がネガティブではなくフラット、ポジティブですらあるかもしれない。

アートの効果をどう定義するのかはつかめていないが、感覚としての変化は明らかに生じている。これまでのアプローチとは大きく異なっていて、かつその効果も大きなもののように感じる。演じるということの影響力なのだろう。

そのなかでこの写真はまさに「発表にものすごく緊張している自分」である。学部3回生の時にシンポジウムで発表したときのことである。50人ほどの参加者、使用言語は英語、日本側の学生代表。様々な要素が絡み合っている。とにかく緊張したことだけを覚えているし、その感覚はこの2年ほど、変化していなかったように感じる。しかしながら今、少し変化している。楽しかった要素に目が向くようになってきている。過去の記憶の捉えなおしが起こっているのである。

おそらくこれからも緊張する場面では緊張するだろう。しかしその緊張の質はこれまでと大きく異なっている気がする。そしてそのことは過去の私の経験にまで影響を及ぼしている。」

1 1. 「過去・現在・未来をつなぐ物語」

「車窓から見る淀川」



電車で揺られながら窓の外を流れていく景色を眺める。

淀川にかかる鉄橋の上を電車は走って行く。

ふと、亡き母のことを思い出す。

母は 1945 年の大阪大空襲を体験していた。

子どもの頃に何度も何度も聞かされた、戦争の話。

「母の描いた油絵」



もっと母の話を聞いておけばよかった。

その人の語りは、その人の人生の物語。

その人が何を語ったか、どう語ったか。

対話というかたちで語り手と聞き手とが物語を紡いでいく。

その人の声、抑揚、そして語っている

時の表情、言葉の間（ま）、さまざまなディテールが合わさってたったひとつの布が織り上げられていくようだ。

わたしが研究テーマにしている「ライフストーリー」は、かたちのない芸術のひとつと言えるのではないだろうか。

書き留めれば「記録」として残るが、その場で紡がれた即興性、その時の空気感は、その時だけで消えていき、二度と同じものは再現できない。「作品」ではないからだ。意図しての語りではないにもかかわらず、聞き手の心の中に残る。年月が経ってもこうして思い出すことができる。

「語り」は、過去と現在を結ぶ。そして、未来へもつながっていく。ある意味、永遠と言える。ライフストーリー研究、子どもたちのナラティブのアドボケイター、それが今のわたしの ABR だと考える。

1 2. 「野に咲く花(と半ズボンの女の子)」



「ABR、そしてドラマセラピーに触れることにより、自分に起こったことは、イメージする力が向上したこと。さらに、『こうしたイメージには、自己理解や他者理解など、探求への鍵が隠されている』ことに気づけたこと。妄想、大いに結構!!ということで、これからも心置きなく、妄想に励みたいと思います。」

画像イメージと解説に現われた大きな特徴は、受講者全員が、授業から触発された、時空を超えた空想の世界を表すために、写真としての映像を切り取り、それを切り取ることでさらに空想が拡大する、という相乗効果を上げながら、考察を進めていることだ。

同じ15回の授業を受けても、一人一人にとって、そこでの学びが違うことは当然である。しかし写真表現として可視化されるととても興味深く感じる。ここで紹介したレポートは一部であるが、並べてみると展覧会のような。

私にとって、新しい試みの授業であったが、シラバスを作る段階からワクワクが止まらなかった。ABRは「リサーチ」なので、もちろん研究であるが、同時に実践でもある。研究者自身の芸術的探索と、協働する人たちが必要だ。そういう意味においても、授業はABRそのものであったと振り返る。今後、ABRという研究法を採用する予定がない人も、自分を含めた人間というものをより豊かに深く探究する際に、この授業で体験したことを少しだけでも活かしていただければ嬉しい。受講生たちの協力により、今年度の記録の一部として、ここに残すことができた。受講生の皆さんに感謝致します。

文献：

Barone, T. & Eisner, E.W. (2012). arts based research, SAGE
Silverman, Y. (2020). The Story Within, Jessica Kingsley